

元寇防塁の石積みの系譜

— 山岳寺院と高麗城郭 —

伊藤 慎二

1. 元寇防塁出現の技術的系譜をめぐる課題

元寇防塁「石築地」は、モンゴル帝国（元朝）による二度目の北部九州侵攻（弘安の役・1281年）に先立ち、鎌倉時代の1276（建治2）年に急造された。博多湾沿岸の全長約20kmにわたって構築された、長大な防御線による遮断型城郭の一種である。その後も、少なくとも室町時代の1342（康永元）年まで修築維持「鎮西要害石築地修固」が継続していたことが知られる（川添 1971：485頁）。

しかし、この防塁の石積み構築に関する技術的系譜はほとんど明らかでない。こうした、長大な防御線による遮断機能の特徴とする城郭は、北部九州では古代の水城がよく知られる。また、近い時期の国内の例では福島県国見町の阿津賀志山防塁がある。ところが、これらは主として土塁で構築されている。同時期の国内で、石塁の類例は知られていないのである。元寇防塁は、「西日本古代山城と戦国城館の中間に取り残されたように存在する軍事的構築物」（齋藤・向井 2016：181頁）という。

そこで、小論では、こうした元寇防塁の石積みの技術的系譜について、特に博多湾沿岸周辺を主とする北部九州とその近隣地域の関連事例から比較検討する。

2. 元寇防塁の石積みと構造

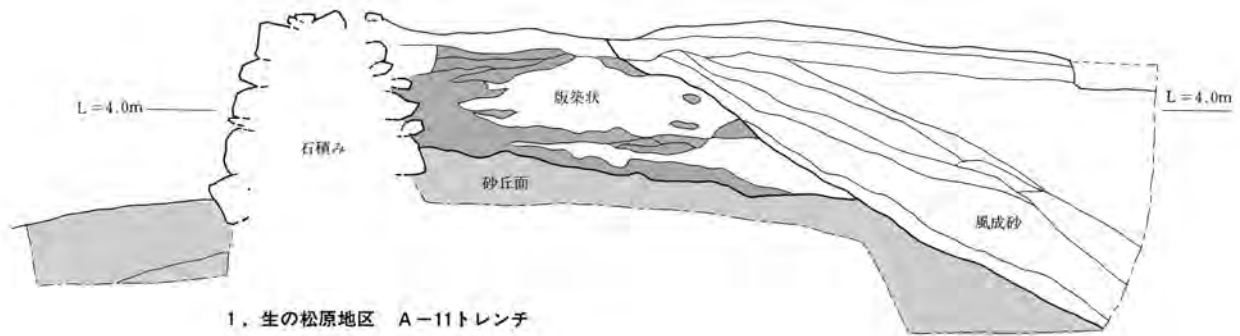
福岡市西区今津^{いまづ}から東区香椎^{かしい}まで築かれた元寇防塁は、実態が依然不明確な香椎周辺を除き、地区ごとの違いが明らかにされている。ただし、これらの地区ごとの違いも、塁壁本体の下半部を主とする基

礎構造に関する情報がほとんどで、防塁の上部構造については不明確な部分が多い。

これまで、西区今津（鏡山ほか 1969）、西区生の松原（鏡山ほか 1968、荒牧編 2001）、早良区西新^{にしじん}（柳田ほか 1970、大塚編 2002、伊藤 2017・2021）、博多区博多（佐藤編 2002）、東区箱崎（福田・森編 2018、三阪・谷編 2019、齋藤編 2020、福永編 2021）などにおける考古学的発掘調査の結果、複数の地区で共通する特徴や、地区ごとの独自の特徴が把握されてきた（柳田・西園 2001、大塚 2013、藏富士編 2019）（第1図）。

防塁基底部分の標高は約3～4mで、断面形態がほぼ台形状（箱形）であることで共通する。しかし、海側（正面）・陸側（背面）とも壁面を石積みにする今津・西新・博多地区に対して、生の松原地区は海側壁面のみを幅狭の胸壁状の石積みとし、一段低い陸側は砂と粘土を版築状に互層に重ねた土塁・土壇状（頂部は「武者走り」状）になっている。また、今津地区の玄武岩主体区間と博多地区は塁壁内部も含めてほぼすべて石積みであるが、西新地区は粘土の基礎地業上に砂と粘土を版築状に互層に重ね海・陸側両壁面のみが擁壁状の石積みである。今津地区の花崗岩主体区間も塁壁内部を砂で満たすが、西新地区と異なり上部は再び石を充填する。なお、西新地区西南学院大学1号館地点例のみ、石塁背後の陸側に独立した版築状の土塁が並走する。そして、最近解明が進んだ箱崎地区は、砂丘の海側にのみ擁壁状の石積みを構築し、その背後陸側に「大溝」が伴う構造である。

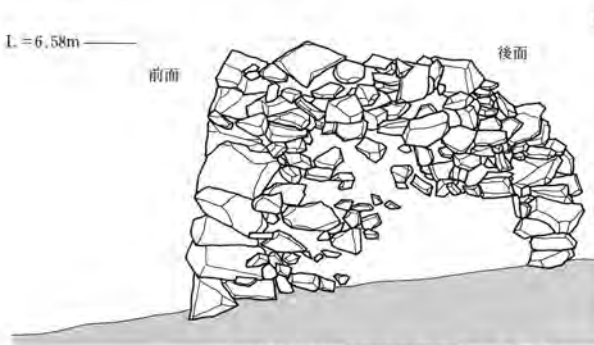
防塁本体の石材は、今津地区では周辺産出の玄武岩と花崗岩、生の松原地区では周辺産出の砂岩（姪



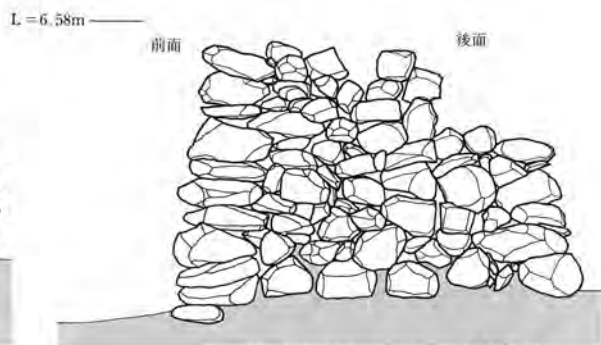
1. 生の松原地区 A-11トレンチ



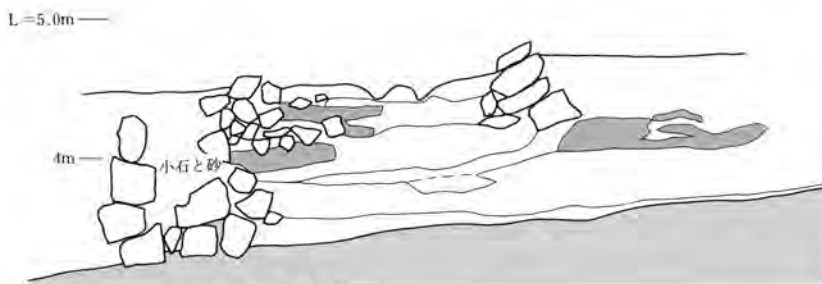
2. 生の松原地区 Dトレンチ



3. 今津地区 (主に花崗岩による石積)

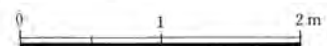


4. 今津地区 (主に玄武岩による石積)



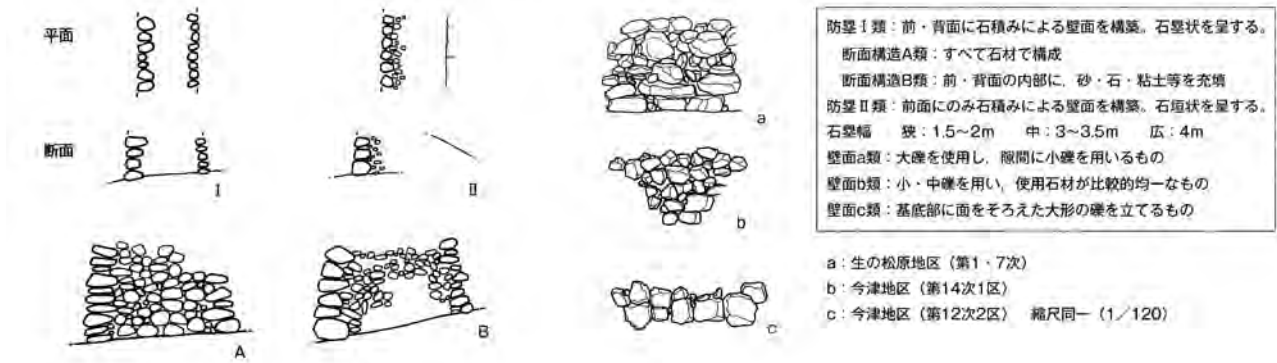
5. 西新地区

1. は本書 (P-9)
 2~5は各地区調査概報 (本書P-4 ④⑤⑥)
 より転載、一部改変
 ■ 粘土による盛土
 □ 地山 (風成砂)



第1図 各地区の元寇防塁断面構造 出典：(荒牧編 2001：24頁 Fig.7)

防塁	断面構造	石壁幅	粘土使用	防塁名
I類	A	狭	有	元寇防塁1・7次〔生の松原〕(a類)
		中	無	元寇防塁2次〔今津〕, 元寇防塁11次〔今津〕(b類), 博多111次 (a類)
		広	無	元寇防塁4次〔姪浜〕?
	B	中	有	元寇防塁3次〔西新〕(a類)
		広	有	元寇防塁8次〔西新〕
II類		無	箱崎81次 (c類), 元寇防塁12次2区? (c類)	



第2図 『元寇防塁調査総括報告書』における分類 出典：(藏富士編 2019：24頁 図17・表2)

浜石)と巨晶花崗岩(ペグマタイト)、西新地区では西区姪浜周辺に多い砂岩(姪浜石)と礫岩、博多地区と箱崎地区では東区名島海岸産の礫岩と砂岩が主として用いられている。

各地区の防塁の基底幅は、生の松原例の陸側土塁状部分も含めて、ほぼ3~4mほどである。本来の高さは不明確な部分も多いが、もっとも保存状態の良い今津地区では約3mの残存例がある。

これらの各地区の調査成果を踏まえて、2019年に刊行された福岡市の『元寇防塁調査総括報告書』は、壁面の石積み・塁壁本体の幅・断面構造の違いで細分し、元寇防塁全体を2類に統合する新たな分類案を提示した。I類は従来から知られる海側・陸側の両壁面が石積みの例に対して、新たにII類として海側壁面のみ石垣状(擁壁状)に石積みを行うという類型が設定されている(藏富士編 2019：24頁)(第2図)。

しかしながら、現在までに把握されている元寇防塁の構造は、上部が崩壊あるいは石材持ち去り・破壊などですでに失われたほぼ下半部のみの状態である。発掘調査で検出された遺構も、基底部付近のみの事例が多い。本来あった上部も含めた全体の構造

については、今後の検討課題といえる(伊藤 2021：88頁)。

3. 元寇防塁の上部構造と女牆

築造当初の元寇防塁上部の具体的な形状に関しては、著名な「蒙古襲来絵詞」(後巻1絵12)で生の松原付近の元寇防塁前面(海側)を、肥後国の御家人竹崎季長一行が通り過ぎる情景描写が、同時におけるほぼ唯一の史資料である(第3図)(註1)。

この場面の防塁上に居並ぶ武士の体勢は、防塁壁面際に腰掛けて足先が見える人物と、鎧の草摺部分など腰から下が防塁の背後に隠れているように見える人物とに描き分けられている。そこで、これらは、防塁石塁部分に対して、そのすぐ背後陸側に一段低い足場状の部分が存在していた状況と解釈され、生の松原地区における元寇防塁復元の根拠の一つとなっている(荒牧編 2001：26頁)(第4図)。

しかし、この生の松原地区における元寇防塁の復元形状に関して、堀本一繁は、絵詞の石塁上周辺の人物表現は防塁壁面に腰掛ける「主将クラスの武将の背後に控え、ともに座している」(堀本 2010：191



第3図 「蒙古襲来合戦絵巻」(「蒙古襲来絵詞」の模写資料) 防塁場面
 出典：国立国会図書館デジタルコレクション



第4図 生の松原地区の復元元寇防塁（左：海側壁面、右：陸側壁面） ※筆者撮影

頁) 状況であるとし、石塁背後の段差の存在そのものに否定的である。

生の松原地区元寇防塁の発掘調査結果(鏡山ほか1968、荒牧編 2001)では、基底部幅で約1.5mの幅狭の石塁と、その後背部陸側に接して砂と粘土を版築状に重ねた土塁・土壇状の「後背盛土」が確認されている。そして、石塁部分の陸側も壁面を意識したやや大きめの石材を整えて積んでおり、石塁壁内部の裏込めのような状況とは明らかに異なっている(第1図1・2)。現状の復元防塁については、本来の状態より高いとする服部英雄の指摘(服部2014:479-482頁)もあるが、陸側背後の版築状部分に対して、海側の石塁部分がより高い胸壁状の形状になっていたことは確実と考えられる。このような胸壁状の石積みは、同時代の中国・朝鮮半島の城郭で一般的な堞・女牆(ひめがき・여장)(愛宕1991、全 2011)と類似する。

現在までのところ、他の地区の元寇防塁の発掘調査所見では、このような構造は知られていない。しかし、現存する防塁遺構は、いずれも上部がかなり失われた状態である。地区により防塁下半部の断面構造は異なるが、いずれも海側の外壁は石積みで共通する。海側からの外観と実戦時の利用方法の共通性が構築作業の前提にあったのであれば、海側壁面上部が胸壁状に一段高く、背後の陸側が一段低い「武者走り」的な通路空間が、他の地区の防塁上部にも共通して設けられていた可能性が充分考えられ

る(註2)。

4. 元寇防塁前後の石積み：在来の系譜

元寇防塁の日本城郭史における特異性は、「石垣構造の軍事的な構築物は、中世の歴史のなかでは、戦国城館を除いて他に類例をもたない」(齋藤・向井 2016:181頁)ことである。

博多湾沿岸周辺地域では、福岡市中央区の^{こうろかん}鴻臚館北館第Ⅱ期(推定:8世紀前半)に属する高さ4m以上の石積み(折尾ほか編 2004)(第5図左)と、糸島市^{いと}怡土城(大門遺跡:8世紀後半頃)にある土塁下部外側の最大高3mほどの石積み(瓜生編2006)(第5図右)(註3)が、7世紀頃の古代山城に続く最後の大規模な石積み構築例といえる。どちらも土留め的な擁壁状の石積みで、鴻臚館の例では石積み壁面内部に裏込め石などが見られないことも指摘されている。

最近では、福岡市博多区博多遺跡群第221次調査の結果、11世紀後半~12世紀前半頃の最大高0.6mほどの港湾関連施設とみられる長大な石積み遺構が検出された。裏込め石で調整し面を整える積み方から、中国との関連性も示唆されている(福岡市教育委員会編 2021)(第6図)。

以上の例を除くと、古代末~中世の博多湾沿岸周辺地域における石積み遺構は、山岳寺院と城郭・城館に限られる。そこで、それらのおもな事例を以下



第5図 鴻臚館（左）と怡土城（右）の石積み遺構



出典：(折尾ほか編 2000：巻頭図版4-7、瓜生編 2006：巻頭5)



第6図 博多遺跡群第221次調査の石積み遺構

出典：(福岡市教育委員会編 2021：1頁1)

にまとめる。

(1) 山岳寺院

a. 薬王寺廃寺（古賀市）：第7図a

犬鳴山系の隔絶された谷間の急斜面に形成された古代末の山岳寺院遺跡である。段状の造成面の段差部複数個所で、擁壁状の低い石積みが検出されている。第3テラス第1トレンチから検出された最大高0.8mほどの石積みが3段連続する一画では、9世紀半ば～10世紀頃の遺物が多数出土している。寺院の存続期間は9世紀前半～12世紀初頭前後で、10世紀～11世紀の遺物出土量がもっとも多いとされる(森下編 1995)。

b. 首羅山遺跡（久山町）：第7図b

犬鳴山系の白山山頂と山麓緩斜面に形成された大規模な中世山岳寺院遺跡である。山麓に多数の段状の造成を行っており、なかでも西谷地区では中世の

擁壁状の低い石積みが複数確認されている。第7図bは、最大高1mほどの西谷地区石垣1の現状である。庭園遺構に関連する盛土造成面の段差に設けられた擁壁状石積みの一部である。同遺跡西谷地区の変遷過程C期に属し、13世紀半ば頃に位置づけられている(江上編 2020)。元寇防塁に近い時期に構築された石積みである。

c. 西油山天福寺遺跡（福岡市早良区）：第7図c・d

脊振山系の油山山麓緩斜面に形成された中世の大規模な山岳寺院遺跡である。発掘調査は行われていないが、詳細な遺構現状調査が行われ、多数の段状の造成面が確認されている。それらの造成された複数の平坦面端部の法面で擁壁状の石積みが確認されている。第7図dは平坦面4の縁辺の石積み、第7図cは平坦面15の東側後背斜面にある石積みの現状である。どちらも高さ1mほどである。採集された輸入陶磁器は12世紀後半～13世紀の資料が多いことから、14世紀半ばには廃絶されたと考えられている(山口・岡寺 2011)。元寇防塁に近い時期に構築された可能性のある石積みである。

d. 正楽遺跡（宇美町）：第7図e・g

宝満山に連なる三郡山系の頭巾山麓緩斜面に形成された中世の山岳寺院遺跡である。6段の段状造成面が確認され、各段差部分におもに擁壁状の石積みが設けられている。中心的な礎石建物跡がある第2平坦部縁辺の石垣2は特に大規模で、現存最大高が2mほどである。また注目されるのは、最下段の



a. 薬王寺廃寺 (森下編 1995: 図版4-2)



b. 首羅山遺跡 ※筆者撮影



c. 天福寺遺跡 ※筆者撮影



d. 天福寺遺跡 ※筆者撮影



e. 正楽遺跡 (松尾 2020: 192頁 写5-26)



f. 一滴遺跡 (松尾・平ノ内編 2013: 図版10)

第7図(1) 博多湾沿岸周辺地域の山岳寺院遺跡の石積み遺構



g. 正楽遺跡第6平坦部「石垣6」 左：外面、右：上部 ※筆者撮影

第7図(2) 博多湾沿岸周辺地域の山岳寺院遺跡の石積み遺構

第6平坦部にある「石垣6」で、内外壁面が石積みの幅狭な石畳状になっている（第7図g）（註4）。出土遺物は、15世紀を中心に前後する時期のものも含む（平ノ内編 2003、松尾 2020）。

e. 一滴遺跡（宇美町）：第7図f

三郡山系の頭巾山麓緩斜面に形成された中世山岳寺院遺跡である。正楽遺跡よりもさらに低位置の丘陵斜面に位置する。4段の段状造成面が確認され、そのうち下位の2段に擁壁状の石積みがみられる。なかでも、最下段の第1平坦部の石垣1は大規模で、現存最大高が2mほどである（第7図f）。出土遺物は、15世紀後半から16世紀中頃が中心である（松尾・平ノ内編 2013、松尾 2020）。なお、石垣1は、石材の長辺と短辺を交互に積み重ねるやや算木積みの隅角部をもつことから、北垣聰一郎の石垣編年（北垣 1987）のI期の1～2（天正年間以前～天正年間）頃に位置づけられる可能性もある。

(2) 城郭・城館

a. 宝満山遺跡群第11次・21次調査地点（太宰府市）：第8図a

三郡山系の宝満山麓の緩斜面に形成された中世城館関連と推測されている遺跡である。造成された

平坦面の尾根続き側を土塁で画し、平坦面下側段差に2段にわたる擁壁状の石積み（21SX006遺構・21SX024遺構）が構築されている（第8図a）。上段側の最大高は1.8mで、下部ほど大形の石材を利用している傾向がうかがわれる。発掘調査の所見では、特に裏込め石などについては言及されていない。層序と出土遺物から13世紀代の遺構とされ、寺院よりも筑前国守護武藤少弐氏の居館との関連性が示唆されている（山村編 2001）。元寇防塁に近い時期に構築された石積みであるばかりでなく、元寇防塁の築造主体にもかかわる可能性がある重要な例である。

b. その他の城郭遺跡

博多湾沿岸周辺地域では、福岡市東区・新宮町の立花山城、福岡市東区の名島城、福岡市中央区の福岡城が、本格的な織豊系城郭石垣の導入例である。しかし、その他の戦国城郭でも、織豊系城郭の石垣との関係が不明確な城郭石積み例が、かなり多く知られる。

現地表で遺構が明瞭に確認できるおもな事例としては、太宰府市有智山城（第8図b）、宇美町頭巾山城（第8図c）、福岡市早良区安楽平城（第8図d）、那珂川市鷲ヶ岳城（第8図e）、糸島市二丈（深江）



a. 宝満山遺跡群21次調査 (山村編 2001)



b. 有智山城 ※筆者撮影



c. 頭巾山城 ※筆者撮影



d. 安楽平城 ※筆者撮影



e. 鷲ヶ岳城 ※筆者撮影



f. 二丈岳城 ※筆者撮影

第8図(1) 博多湾沿岸周辺地域の城郭城館遺跡の石積み遺構・「非織豊系城郭石積み」



g. 二丈岳城の石塁状遺構 左：内面、右：上部 ※筆者撮影

第8図(2) 博多湾沿岸周辺地域の城郭城館遺跡の石積み遺構・「非織豊系城郭石積み」

岳城（第8図f・g）などがある（岡寺編 2014・2015、林・岡寺 2015）。

このうち、有智山城については、第8図b画面外の左側に算木積みの特徴部分もあることから、宮武正登により16世紀後半の改修可能性が指摘されている（山村編 2001：90頁）。しかし、その他の城郭例も含めて、裏込め石を欠くかまたは不十分で、自然石や粗い割石を不ぞろいの面のまま擁壁状に石積みをするものでいずれも共通する。ただし、二丈岳城には、石塁状の部分も知られる（第8図g）。これらの仮に「非織豊系城郭石積み」と名づけられる事例の正確な構築年代などはまだ不明である。戦国期を中心に、織豊期に入ってからからの構築例を含むことも考えられる。しかし、博多湾沿岸周辺地域における中世山岳寺院の擁壁状石積み例とそれらの年代観から判断すると、「非織豊系城郭石積み」もその技術的系譜の延長上に無理なく位置づけられるとみられる。こうした状況は、中井均らが指摘する、安土城築城直前の関西地方周辺における城郭石垣と寺院との関係（中井 1996、岡本 2006）に相似するといえる。

博多湾沿岸周辺地域の石積み事例を検討した結果、古代末以降の現存・確認例はおもに中世山岳寺院における土留め目的の擁壁状石積みに偏り、それらの延長上に「非織豊系城郭石積み」も位置づけら

れる見込みが得られた。ところが、山岳寺院から戦国城郭へと続く在来石積みの系譜のなかには、元寇防塁の存在感が明らかに希薄なのである。

元寇防塁の特徴である、①長大な防御のための遮断線を、②内外壁面が石積みの石塁で築き、③生の松原地区元寇防塁のような胸壁状の石積みを伴う事例は、いずれも少なくとも同時期に類例を確認できなかった。

同時代の日本全域を考慮に入れても、長距離におよぶ遮断型の城郭技術の先行的採用例は、大宰府の水城を除くと、奥州藤原氏が福島県国見町に構築した二重空堀をはさむ三重土塁の阿津賀志山防塁や、神奈川県鎌倉周囲をめぐる山稜部の切岸などがあげられる程度である（伊藤 2017：124-125頁、伊藤 2021：89頁）。国内の遮断型城郭の類例は、土塁・空堀または切岸のみで、長大な石塁の例は確認できない。

つまり、元寇防塁の出現には、国内のみでは十分に系譜をたどることができない技術的な飛躍と隔絶が存在するのである。

5. 高麗城郭との比較

しかし、博多湾沿岸の近隣地域ということであれば、実はこれら元寇防塁の①～③の特徴を備えた城



a. ソクセゴル千里長城城壁上部
(조선유적유물도감편찬위원회 1991 : 247頁 401)



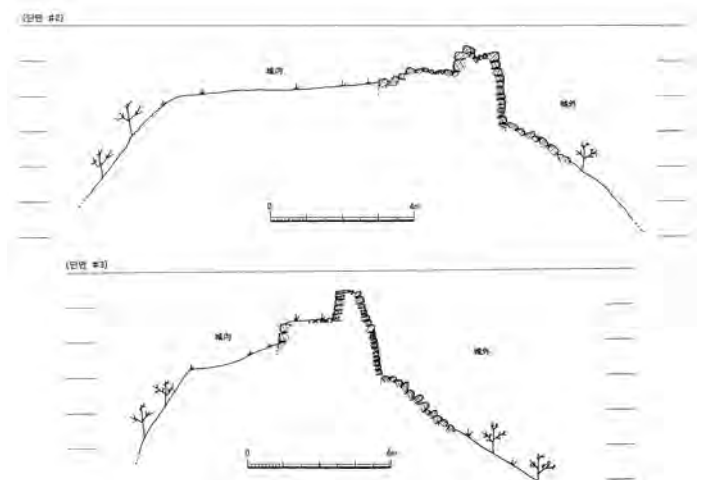
b. 鵠原山城城壁上部
(차·신·노·박 1998 : 200頁 写真16)



c. 鵠原山城城壁女牆断面
(차·신·노·박 1998 : 202頁 写真20)



e. 涯月環海長城城壁内側
(社団法人耽羅文化遺産保存会撮影)



d. 鵠原山城城壁断面
(차·신·노·박 1998 : 120頁 図面7)

第9図 高麗城郭の城壁

郭がかなり一般的にみられる地域がある。玄界灘・対馬海峡対岸の朝鮮半島・高麗などの東北アジア地域である。

高麗では、モンゴル帝国の高麗侵攻以前から、北方の契丹・女真対策のため、11世紀前半に黄海側の鴨緑江河口から咸鏡南道の日本海沿岸まで朝鮮半島北部を横断する千里長城(천리장성)を構築している(조선유적유물도감편찬위원회 1991、高 2015)。地域によって残存状態に大きく差があり、良好な例では現存城壁の高さが4～7mほどである。第9図aは、慈江道東新郡のソクセゴル(속새골)の長城遺構で、石塁城壁上部の外面側に女牆(여장)＝胸壁、その内側に廻郭道(회곽도)＝「武者走り」の並走する状況が分かる。

こうした石塁城壁の構造は、13世紀前半～中頃の前蒙抗争期(対モンゴル抵抗戦期)における高麗各地の山城(김 2017)にも広く共通する。たとえば、第9図b・c・dは、韓国中部の江原道原州市にある鶴原山城(영원산성)の残存状況が良好な東南城壁である(차·신·노·박 1998)。石塁城壁上部の外面側に女牆、その内側に廻郭道が並走している。石塁城壁の基底幅は3mほどで、城壁外面の現存高は2～3m、女牆内側の現存高は1mほどである。ただし、特に城壁外面の高さは、土台となる山稜地形に影響を受けてかなり幅がある。そのため、内外壁面が石積みの夾築(협축)の石塁城壁と、外壁面のみが石積みの片築(편축)(内側が土塁状の場合・部分は内托:내탁)となる擁壁状城壁の部分もみられる。これらの城壁の構造は、高麗時代前後の各時代の城郭にも広く共通する(손 2011、나·하 2016)。

さらに博多湾沿岸地域に近接する濟州島(耽羅담라)には、立地・構造・時期・性格まで、元寇防塁と類似した事例がある。濟州島北海岸を中心に東海岸の一部にまで断続的に築かれた環海長城(환해장성)は、高麗元宗王期の1270年に構築されている。三別抄(삼별초)政権最後の濟州島における1273年の対蒙抗争の際にも増築活用された。しかし、その後の朝鮮王朝期以降も引き続き修築や改変

が行われたため、築造当初の高麗期の状態は不明な部分が多い(김 2017:199-200頁、金·文 2015)。

残存遺構が良好で大規模な例として、濟州島北西海岸の涯月里(애월리)環海長城(第9図e)がある。内外壁面が石積みの夾築石塁城壁で、外壁の現存高5m・内壁の現存高3.8m・横幅7mである。その他の地区は、残存最大高と横幅がともに数m程度の例が多いようである。また、石塁城壁上部外面側の女牆とその内側に並走する廻郭道の残存例も、各所で確認されている(김·신·박 1996、고·강·강 1998)。

なお、版築工法も石積みと同じく高麗の城郭では多用されている。対蒙抗争期の高麗王朝の遷都宮城である江華島の江華都城(강화도성)や、その後の三別抄政権最後の拠点である濟州島の缸坡頭里城(항파두리성)など、多くの版築土塁使用例がある(이 2016、고·강·강 1998、김 2017、오·진 2017、尹 2015)。

6. 考察

文化財としての元寇防塁は、戦前の排外的で「神国」思想的な国威宣揚とその記念物顕彰の社会風潮のなかで、最初の価値評価が行われた。その解釈や研究には、最初から一定の枠がはめられていた状況であった。そのため、元寇防塁は、日本城郭史のなかで明らかに特殊な位置を占めるにもかかわらず、同時代の世界史的観点から十分な検証が無いまま戦前の研究が開始された。しかし、元寇防塁築造当事者の鎌倉幕府と出先の太宰府にとっての最優先事項は、モンゴル軍の侵攻に対処できる築城技術である。内外のあらゆる関連情報の収集と検討が当然行われたはずである。

蒙古襲来以前の日本と高麗の関係は、対馬を中心とする「進奉船」を介した私貿易や、鎌倉幕府が太宰府に派遣した武藤(少武)氏と高麗使節との間で、初期倭寇禁圧対策を主とする外交交渉も積み重ねられていた。武家外交により「進奉定約」が高麗との間で結ばれるなどの進展があったことも知られ

る(近藤 2019)。さらに、モンゴルによる高麗侵攻に対抗した三別抄政権が、日本に対モンゴル抵抗戦への協力申し入れ(1271・文永8年「三別抄牒状」)を行っている(石井 2017)。このように、蒙古襲来前段階に、日本と高麗・三別抄の間で多様な交流が存在し、そのなかには軍事分野にまでかわる情報交流があったことも改めて注意される。

そして、文永の役(1274年)において、モンゴル軍の「てつはう」といった火薬兵器などの新兵器・戦闘方法に直面した。世界最先端水準の国際紛争を初めて経験し、当時の日本国内で一般的な「垣桶」程度の防御施設(川合 1996)の限界を、この時に強く認識したことは明らかである。そこで、このような蒙古襲来前段階の高麗・三別抄と日本との関係を改めて念頭に置くと、たとえば記録に残っていない三別抄・高麗系の博多湾沿岸周辺地域在留者や、高麗の城郭を実見した関係者による、元寇防塁の構想と築造への直接・間接的関与があったことが十分に推測できる。

同時代には、山岳寺院などでの石積みや版築技術と遮断型城郭の先行例が存在した。そこに高麗の城郭に関する知識が新たに加わることで、国際紛争規模に対応した長大な遮断型城郭である元寇防塁の構築が初めて可能になったと推察される(註5)。

しかし、このような国際紛争動向と連動した元寇防塁築造とその維持のための技術体系の必要性は、比較的短期間で終了した。そのため、地域の石積み技術の系譜に存在感をとどめなかった可能性が考えられる。日本の城郭史における元寇防塁の位置は、古代山城や幕末の稜堡式城郭に類似するといえる。

註

- 1) 防塁構築当時の描写としては、1281(弘安4)年の「武雄神社文書」に、「桶井石築地上垣桶令用意之」という記述がみられる(川添 1971: 186-187頁)。防塁上とその近くには、「垣桶」と「桶」の両者が備えられる必要のあったことがわかる。そのほかに、防塁の修築に関わる史料で、防塁破損箇所の部分名称として、「高」・「裏加佐」・「加佐」・「裏」・「裏芝」という語句が知られる(川添 1971)。このうち、「裏加佐」については、後方(陸側)から石塁へ登りやすくするための土盛りなどの部分を指すと従来想定されていた(相田 1982: 202-203頁、川添編 1971: 242頁)。

最近、墨壁上部から後背砂地の植栽などとする解釈も新たに示された(齋藤編 2020: 187頁、福永編 2021)。「高」については、これまであまり明確な解釈は示されていない。

また、「乱杭」「切立」という語句についても、相田二郎は防塁付属の障害物である可能性を指摘しているが、川添昭二は特に「乱杭」について防塁近隣河川河口部に設けた障害物と解釈している(相田 1982: 205-207頁、川添 1971)。なお、その想定地の一つである室見川河口西側の西区愛宕(鷺尾)山の北側尾根に時期不明の切岸状・平場状地形がみられる(伊藤 2021: 91頁)。

- 2) 今津地区の元寇防塁に関して、戦前の川上市太郎による調査報告に掲載された1921(大正10)年の断面実測図では、海側壁面に対して陸側壁面がかなり低くなっている。そして、防塁上端部は、海側壁面寄りにやや平坦面があって、陸側壁面に向かって緩やかに低くなる形状が示されている(川上 1941: 68頁)。また、1968(昭和43)年の発掘調査成果の報告(鏡山ほか 1969)中の断面実測図でも、海側壁面が高く、陸側壁面がやや低くなる形状が示されている(第1図3・4)。同報告中では、直接その形状についての言及はないが、海側壁面に対して陸側壁面の角度が緩く、海側よりも小形の石材を多用することで陸側壁面がより不安定で崩落しやすい状態であったことを指摘する(鏡山ほか 1969: 8頁)。しかし、こうした断面形態の特徴は、海側壁面上部が胸壁=女牆状に一段高く、背後の陸側が一段低い「武者走り」的な通路空間が存在した痕跡としても解釈可能と考えられる。

また、西新地区の元寇防塁のうち、西南学院大学中央キャンパス1号館建設に先立って検出された遺構は、最初に版築状の土塁が構築され、その後最大でも1m程度のすぐ海側に隣接して石塁本体が構築されたと考えられている(大塚編 2002)。この調査所見に基づき、石塁と土塁がそれぞれ独立して並走するように現在の遺構復元展示が行われている。しかし、この場合、石塁と土塁の間で防塁守備側の行動と視界が完全に阻まれることになる。そのため、この石塁・土塁間の間隙空間も、防塁完成時には砂などで埋めて、生の松原地区の防塁とある程度似通った断面構造になっていた可能性が考えられる。

なお、土塁自体の性格も未解明である。西新地区の国史跡指定地内の防塁では、墨壁本体内部を版築状に構築していることが特徴である(柳田ほか 1970)。そこで、西南学院大学1号館の土塁も、防塁構築途中で当初計画よりも海側に墨壁本体が構築されることになったため、構築基礎段階のまま中断された墨壁本体中核部分の遺構という解釈も考えられる。土塁本体背後に直交するように等間隔で付属する控え状の小土塁の先端まで含めると、各地区の平均的な防塁基底幅である3~4mほどになる点も、これと符合する。

- 3) 怡土城(大門遺跡)で検出された石積みは、一部下部が土塁線の外側に大きく突出する「テラス状遺構」を形成することも指摘されている(瓜生編 2006: 46頁)。これは、中国・韓国の城郭に一般的な「馬面」・「雉城」に類する城壁付属防御施設の可能性が考えられる。
- 4) 福井県勝山市の白山平泉寺南谷坊院跡では、16世紀後半に位置づけられる幅狭の低い石塁状遺構が多数検出され、「土塀基礎石垣」と名付けられている(阿部編 2014)。正築遺跡の第6平坦部「石垣6」も、この「土塀基礎石垣」に類似する可能性がある。ちなみに、「土塀基礎石垣」とみられるより良好な類似遺構を、福岡市東区・新宮町の立花山城の「小つぶら」地区で確認できる。
- 5) 同時代の東北アジアでは、長大な遮断型城郭=長城がかなり一般的である。たとえば、モンゴルそのものにも「チンギス=ハーンの長城」と呼ばれるような多数の長大な長城遺跡がある。それらには、土塁と石塁の構築例の両者が含まれるが、構築者・時期性格などについては、まだ多くの未解明の課題が残されている(ボルジン編 2021)。

なお、元寇防塁と同時代で、博多湾沿岸周辺地域と関わり深い

中国・南宋の城郭は、城郭都市と山城が主体で、防塁のような長大な遮断型城郭は知られていない。城壁の基本構造は高麗と共通する部分が多い。しかし、各種攻城兵器や火薬兵器の発達に対応して、城壁の規模も大きく、壁材に膨大な磚を使用し、城壁上の女牆などの胸壁も多様な形態が創出されている。また、城郭都市の城壁周囲には護城河＝外堀のめぐる例が多い(栗 2008、愛宕 1991)。

引用・参考文献

- 相田二郎 1982『蒙古襲来の研究』増補版、吉川弘文館(東京)
- 阿部来編 2014『史跡 白山平泉寺総合整備事業報告書』、勝山市教育委員会(福井)
- 荒牧宏行編 2001『国史跡 元寇防塁(生の松原地区)復元・修理報告書』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第694集、福岡市教育委員会(福岡)
- 石井正敏 2017『高麗・宋元と日本』、石井正敏著作集第3巻、勉誠出版(東京)
- 伊藤慎二 2017「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構：大学博物館北側の元寇防塁」、『国際文化論集』第31巻第2号：121-144頁、西南学院大学学術研究所(福岡)
- 伊藤慎二 2021「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構：新資料の紹介 附 戦前の絵葉書に写る西新元寇防塁」、『国際文化論集』第35巻第2号：83-116頁、西南学院大学学術研究所(福岡)
- 瓜生秀文編 2006『国指定史跡 怡土城跡』、前原市文化財調査報告書第94集、前原市教育委員会(福岡)
- 江上智恵編 2020『首羅山遺跡Ⅱ 発掘調査報告書』、久山町文化財調査報告書第22集、久山町教育委員会(福岡)
- 大塚紀宜 2013「第3章 元寇防塁と博多湾：防塁の構造とその戦略的機能について」、『新修福岡市史』(特別編 自然と遺跡からみた福岡の歴史)：302-317頁、福岡市(福岡)
- 大塚紀宜編 2002『西新地区元寇防塁発掘調査報告書』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第726集、福岡市教育委員会(福岡)
- 岡寺良編 2014・2015『福岡県の中近世城館跡』Ⅰ・Ⅱ(筑前地域編1・2)、福岡県文化財調査報告書第249・250集、福岡県教育委員会(福岡)
- 岡本智子 2006「〈イシクラ〉考：織豊期以前の石垣とその工人」、『織豊系城郭の成立と大和』：137-153頁、大和中世考古学研究会・織豊期城郭研究会(奈良)
- 愛宕 元 1991『中国の城郭都市：殷周から明清まで』、中公新書1014、中央公論社(東京)
- 折尾学・大庭康時・塩屋勝利編 2004『鴻臚館跡』14、福岡市埋蔵文化財調査報告書第783集、福岡市教育委員会(福岡)
- 鏡山猛ほか 1968『福岡市生の松原元寇防塁発掘調査概報：鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の考古学的調査』、福岡市教育委員会(福岡)
- 鏡山猛ほか 1969『福岡市今津元寇防塁発掘調査概報：鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の第二次(昭和43年度)調査』、福岡市教育委員会(福岡)
- 川合 康 1996『源平合戦の虚像を剥ぐ：治承・寿永内乱史研究』、講談社選書メチエ72、講談社(東京)
- 川上市太郎 1941『元寇史蹟(地之巻)』、福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第14輯、福岡県(福岡)[復刻：1979 福岡県文化財資料集刊行会(福岡)]
- 川添昭二 1971『註解 元寇防塁編年史料：異国警固番役史料の研究』、福岡市教育委員会(福岡)
- 北垣聰一郎 1987『石垣普請、ものゝ人間の文化史 58、法政大学出版局(東京)
- 金日宇・文素然(井上治・石田徹・木下順子訳) 2015『韓国・済州島と遊牧騎馬文化：モンゴルを抱く済州』、明石書店(東京)
- 藏富士寛編 2019『元寇防塁：調査総括報告書』、福岡市埋蔵文化財調

- 査報告書第1382集、福岡市教育委員会(福岡)
- 高 寛敏 2015「朝鮮史上における長城建設」、『東アジア研究』第63号：17-24頁、大阪経済法科大学アジア研究所(大阪)
- 近藤 剛 2019『日本高麗関係史』、八木書店(東京)
- 齋藤慎一・向井一雄 2016『日本城郭史』、吉川弘文館(東京)
- 齋藤瑞穂編 2020『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3 箱崎遺跡：HZK1802・1803・1805・1902 地点』、九州大学埋蔵文化財調査室報告第4集、九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 佐藤一郎編 2002『博多 85：博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第711集、福岡市教育委員会(福岡)
- 中井 均 1996「安土築城前夜：主として寺院からみた石垣の系譜」、『織豊城郭』第3号(特集・織豊期城郭の石垣)、35-54頁、織豊期城郭研究会(滋賀)
- 服部英雄 2014「第九章 石築地(元寇防塁)考」、『蒙古襲来』：467-483頁、山川出版社(東京)
- 林隆広・岡寺良 2015「九州北部における織豊期以前の城郭石垣」、『構築技術からみた織豊系城郭の石垣の成立』(織豊期城郭研究会2015年度小牧研究会集資料集)：91-113頁、織豊期城郭研究会(滋賀)
- 平ノ内幸治編 2003『正楽遺跡：正楽遺跡範囲確認調査に伴う発掘調査概報』、宇美町文化財調査報告書第15集、宇美町教育委員会(福岡)
- 福岡市教育委員会編 2021『中世博多の港：博多遺跡群第221次調査出土の港湾関連遺構』、福岡市教育委員会(福岡)
- 福田正宏・森貴教編 2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡：HZK1601・1603・1604 地点』、九州大学埋蔵文化財調査室報告第1集、九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 福永将大編 2021『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告4 箱崎遺跡：HZK1900・1905・2001・2002・2004 地点』、九州大学埋蔵文化財調査室報告第5集、九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 堀本一繁 2010「一 蒙古襲来と博多：元寇防塁の築造と異国警固体制」、『史跡で読む日本の歴史6：鎌倉の世界』：186-211頁、吉川弘文館(東京)
- ボルジギン＝フスレ編 2021『モンゴルと東北アジア研究』第6号(特集：チンギス・ハーンの長城：歴史、現状と遺産)、風響社(東京)
- 松尾尚哉 2020「第五編中世 第五章 宇美町内の中世遺跡」、『新修宇美町誌』：190-201頁、宇美町(福岡)
- 松尾尚哉・平ノ内幸治編 2013『宇美町内遺跡発掘調査報告書：埋蔵文化財試掘確認調査報告 神領・浦尻古墳群(浦尻支群)発掘調査報告一滴遺跡発掘調査報告』、宇美町文化財調査報告書第18集、宇美町教育委員会(福岡)
- 三阪一徳・谷直子編 2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡：HZK1701・1702・1704・1705・1706 地点 付 HZK1802/1803 地点概要報告』、九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集、九州大学埋蔵文化財調査室(福岡)
- 森下靖士編 1995『薬王寺廃寺』、古賀町文化財調査報告書第20集、古賀町教育委員会(福岡)
- 柳田純孝ほか 1970『福岡市西新元寇防塁発掘調査概報：鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の第三次(昭和44年度)調査』、福岡市埋蔵文化財調査報告書第11集、福岡市教育委員会(福岡)
- 柳田純孝・西園禮三 2001『元寇と博多：写真で読む蒙古襲来』、西日本新聞社(福岡)
- 山口裕平・岡寺良 2011「筑前・西油山天福寺跡の基礎的研究」、『福岡大学考古資料集成』4(特集：九州中世学の構築2)：7-46頁、福岡大学人文学部考古学研究室(福岡)
- 山村信榮編 2001『宝満山遺跡群Ⅲ：第11次・21次調査報告書』、太宰府市の文化財第55集、太宰府市教育委員会(福岡)
- 尹龍嬭(和田健太訳) 2015「韓国における最近の三別抄遺跡の調査と研究」、『韓国研究センター年報』13：1-6頁、九州大学韓国研究センター(福岡)

- 粟 品孝 2008 『南宋軍事史』、上海古籍出版社（上海）
- 고창석·강창화·강창언 1998 『제주항과두리 항몽유적지 : 국가문화재 지정보고서』、제주도（제주）
- 김봉옥·신석하·박성중 1996 『濟州의 防禦遺跡』、제주도（제주）
- 김호준（金虎俊） 2017 『고려 대몽항쟁과 축성』、서경문화사（서울）
- 나동욱·하병업 2016 『釜山성곽 : 보루를 쌓아 근심을 없애다』、부산박물관 학술연구총서 제51집、부산박물관（부산）
- 손영식（孫永植） 2011 『한국의 성곽』、주류성출판사（서울）
- 오연숙·진신승 2017 『삼별초와 동아시아』、국립제주박물관·국립나주박물관·강화역사박물관（강화）
- 이 희인 2016 『고려 강화도성』、한국중세사학회 연구총서 8、혜안（서울）
- 조선유적유물도감편찬위원회 1991 『조선유적유물도감』 10권 고려편（1）：건물·성、조선유적유물도감편찬위원회（평양）
- 차용걸·신호철·노병식·박중균 1998 『原州 鶴原山城·海美山城：地表調査報告書』、中原文化研究叢書第5冊、忠北大学校中原文化研究所（청주）

伊藤 慎二（いとう しんじ） 西南学院大学博物館館長・国際文化学部教授